

ナイアガラタイムス

2021年10月20日 第8号

人 力 夢



目次

シネマ権⑥	『TAP~TAP LAST SHOW』	・・・ 2
THE極み	光(あかり)工房 石栗芳恵さん	・・・ 3
名盤探検⑦	オフコース 『The Best of My Life』	・・・ 7

シネマ滝⑥

『TAP～THE LAST SHOW～』（2017年6月公開）

本作は、水谷豊が初めてメガホンを取った作品。水谷が昔ニューヨークでタップダンスショーを見た時、鳥肌が立ち涙が出るほどの感動を味わった。その感動に多くの人達を連れていきたいと思い、40年間その構想を暖めていたのだ。

この作品の大きなポイントは、役者がダンスを踊っているのではなく、プロのダンサーが演技をしているのだ。公開の2年前から500人のプロダンサーを集め、大がかりなオーディションを行い、5人のダンサーを選び、映画制作に入っていった。だからダンスシーンは圧巻だ。

ストーリーは、「TOPS」の支配人、毛利（岸部一徳）は、半世紀近く続いた劇場を閉める決断を下した。そこで昔からの親友、元天才ダンサー渡（水谷豊）に「最後に最高の夢を見よう」と最後のショーの演出を依頼する。渡は「それならば、一流のダンサーのショーではなく、これからてっぺんを目指す若いダンサーを集めてショーをつくろう。そのかわり舞台セットは一流にな」と言い、二人の取り組みは始まる。

そしてオーディション。劇場の舞台にダンサーを目指す若者達が集まり、渡がきざむリズムに合わせてタップダンスを踊る。どんどん激しさが増していくリズム。何人のもダンサーがそのリズムについていけずに脱落していく。残った5人が「TOPS」の最後の舞台を目指す。

毛利がショーの準備中に倒れ、助からないと誰もが思った（その後の事は映画を観て確認を）。銀行からの融資も解除され劇場の存続も不可能になり、ショーは中止に。けれど、若者達の情熱はおさまらずに舞台に向かう。プライドが高い渡も、あちらこちらに頭を下げ、ショーは開催される事に。

それぞれの事情を抱えるダンサー達。ホストクラブで働く者。父親が反対する中「どうしても踊りたい」と言い持病と闘いながら踊る女性。吃りがある者。それぞれが切磋琢磨しショーの当日へ。

滝が好きなのはショーの幕が上がる前のシーン。それまで色々あった人達が劇場に集まり、みんな思い思いに開演を待っている。その表情や振る舞いが物凄くさわやかでたまらない。

そして映画のラスト20分間は、圧巻のタップダンス。

本当に映画の一部しか書けてないのだが、ダンサー一人一人の生活、毛利達が移動する時のオープンカーの格好良さ。見て欲しいところは沢山ある。

ぜひ、一度チェックを。



THE 極み

今回の「極み」は、相模原市中央区弥栄の陶芸教室「光（あかり）工房」の石栗さんに取材させて頂いた。あまり触れる機会がない陶芸に焦点を合わせてみる事にした。この「極み」のコンセプトは、滝と一緒に色々な世界を見にいこうという事で始めた。

学生時代を沖縄で過ごされた石栗さん。お会いして、お話をさせてもらっていくと、ふんわりとした優しさと、物凄いエネルギーを感じた。きっと皆さんも読んでいくうちに、それを感じてくれることでしょう。

【自分が焼いた陶芸のお皿で、もてなしたかった】

私は、陶芸がやりたくて始めたのではなくて、料理が大好きだったんです。家で国際交流のボランティアをやっていたんです。それでホームステイの人達を受け入れる時にウエルカムパーティというのを開くと、お料理を出すじゃないですか。そこで自分が作った料理を自分で作った陶芸のお皿で、もてなしたら楽しいだろうなと思ったのが最初の気持ち。

【陶芸教室を探す】

それで教室を探す事になった。その当時、相模原には陶芸教室というものがなかった（陶芸教室だけで生活を成り立たせていくのは、すごく大変な世界で）。やっと見つけた所が、昼間は陶芸教室をやっている、夜はスナックをやっている教室だった。

先生は武蔵美を出られていて、そこに習いに行っていたんです。そうやって陶芸を習っていくうちに、最初は「料理が好きだから」という気持ちだったんですけど、段々やっていくうちにのめり込んでいったんですね。楽しくて楽しくて。それで10年ぐらいその先生に習ったんです。

【教室を開く事になった】

この場所で主人が昔、設計事務所をやっていたんです。その設計事務所が場所に移る事になったんです。それで人に貸すのも大変なので、せっかく陶芸をやっているんだから、ここで教室を開いたらどうかという事になり教室を開く事になったんです。

その時、たまたま習っていた先生が、陶芸を辞められる事になって、窯がいらなくなって「石栗さん、窯買わない」と聞かれて「買います」と飛び付いて買って、窯も手に入った。

最初は、私も陶芸をはじめて10年ぐらいだったので、そんな人に教えるとかではなくて、好きな人達が集まって同好会みたいな形でやればいんじゃないと言って始めた。だから最初の頃は先生が手伝いにきて下さり、教えてもらいながらやっていた。そして、3年ぐらい経って先生から「もう大丈夫じゃない」と言われたので、そこから本格的に教室としてやっていく事になったんです。

【展覧会を開いたら】

その頃、近くの団地に緑風園の利用者の方が住んでいた。そこに送迎をしていた職員の方から「陶芸を手伝って下さる方がなかなかいないので、来てもらえませんか」と頼まれたんです。そこから教室をやりながら緑風園にも教えに行くようになったんです。

その頃は、利用者さん達と色々な所に行ったんです。窯を見学に行ったり。そして今度は、津久井やまゆり園にも来てくれないかと言われて行くようになって、両方に行くようになったんです。

その時に初めて、緑風園の人達とやまゆり園の人達とウチの生徒さん達と展覧会を開いたんです。そしたら、全部の新聞社が取材をして記事にしてくれたんです（その頃は、そういう事が珍しかったからだと思うんですが）。その頃は生徒さんが25人ぐらいしかいなかったのに、その新聞のおかげで、いっぺんに生徒さんがウワーと増えちゃって100人ぐらいになっちゃったんです（あの時は本当にビックリしましたね）。

「こんな狭い所に100人に増えちゃって、どうしよう」と思ったんですけど、「何時に来て何時に帰る」という形式ではなくて、「好きな時間にきて好きな時間に帰る」というシステムに変えたんです。そしたらうまくまわっていくようになったんです。



【陶芸の大変なところ、面白いところ】

陶芸の大変なところは、陶芸ってすごく奥が深くって、私も陶芸を始めて40年になるんですけど、40年経っても分からない事が沢山ある。だから常に勉強。偉い先生のところに研修に行ったり、まだそういう事をしなければならない。

それから、ひとつの粘土が20キロあるんです。その20キロの粘土を材料屋に買いに行きます（たまに頼めば送ってくれるところもありますが）。買ってきて、車を家の前に停めて、その20キロの粘土を運ばなければならない。

今、こうやって削っているんですけど、固くなった使い古しの粘土を水につけて再生したりとか、それから窯詰め窯出しというのがすごく大変なんですよ。大きい物もあるし重たい物もある。それを何十個も入れて焼く。

順序を追って話していくと、まず作品を作りますね。それを一週間ぐらい乾かします。乾かした後削って、素焼きで750度から800度の温度で一週間ぐらい焼きます。焼いて覚ましたら、また出します。そして様々な色の上薬をかけて、1250度から1500度で今度は本焼きをします。その出したり入れたりするのが大変ですね。

面白いところは、色々な発想でなんでも出来るんですよ。焼き物って。人形も作れば、花瓶も作れる。作れない物がないぐらい、なんでも作れるところが面白いところ。

自分の発想で、お皿だけではなくて、花瓶も作れば、ランプシェイドと言って明かりも作れる。作る事に決まりがないということが面白いですね。

【学童保育との関わり】

学童保育もやっているんですよ。出張教室ですけど楽しいですよ。毎年、粘土を持って行って、子供達が作って、こちらで焼いてあげると、みんな喜んでくれるんですよ。

今年コロナでみんなお休みになっています。けれど、ある小学校の学童保育だけは先生がどうしても「毎年やっているからやりたい」とおっしゃってくれているのです。それで私も熱意を感じて、やってあげたいと思い「じゃあ市からは外部の人を入れないで欲しいと言われてるので私は入らないけれど準備だけはやるから、どういう物を作るかを先生が指導して」と言って、クリスマスに向けてウチで焼く事になっています。



【津久井やまゆり園に思う事】

今、津久井やまゆり園が新しくなりましたよね。7月8月に横浜の保土ヶ谷から引っ越したんですね。全部引っ越したじゃなくて、半分はまだ残っているんですね。私は両方に月一回ずつ行っているんですね。

みんな生き活きとしていて、陶芸を一生懸命やっているんです。私が車で行くとウワーと迎えに来てくれるんです。それが楽しいかな。別に陶芸をうまくやろうとかではなくて、自分の思うようにワイワイやるというのが、やまゆり園との関わりだと思っています。

【沖縄のこと】

私は熊本が出身。父が熊本で母が沖縄。父と母が、私が中学の時に離別して、母が沖縄に帰ったので私も学校を卒業するまで沖縄にいて、それからこちらに来ました。その頃はまだ返還前だったのでパスポートで来たんです。

沖縄の人って、すごく大らかなんですよ。なにかにつまづくような事があっても「大丈夫、なんとかなるよ、なんとかなるよ」という感じ。そういうところが大好き。

うちの母親も苦勞して色々な事業を起こして4人の子供を育てたんですね。兄は亡くなったんですけど、みんな立派な人になった。

沖縄はいいところですよ。ただ、夏はちょっと暑くて、9月になると台風のすごいのが来る。そこが難点なんですけれど、慣れるとそれはその土地柄で、台風は台風で構わなくなる。

私、シュノーケルをやるんですよ。沖縄のきれいな海でお魚と一緒にになれる。

私、沖縄に窯を持っているんです。それは何故かということ、本当はある程度、年老いたら、沖縄でゆっくり自分の作品を造りながら暮らしていきたいという夢を持っていたんです。でも、この2年間コロナで断絶状態になっているんです。

だけどいつかは、釜も車椅子でも使えるようになっているので、歩けなくなっても元気だったら、90才になっても100才になっても、行ってゆっくり自分の作品を造って、海を見ながら暮らしていきたいという夢は、まだ捨てていません。



名盤探偵団⑦

オフコース「The Best Year of My Life」

(84年6月発売)

1970年のこと。横浜で同じ高校だった小田和正と鈴木康弘がレコードデビューを果たした。それがオフコースだ。

今、デビューの頃のシングルを聞いてみているのだが、最初の2枚は驚くほどのフォーク。

時代や周りの大人達が求めていたのだろうか。

その中で、二人はきっと葛藤していたのだろう。

その後10年はヒットに恵まれなかった。

74年の札幌の道新ホール（キャパ700席）でのコンサートでは観客がわずか13人だったというエピソードがあるほどだ。



79年8月には、松尾一彦、清水仁、大間ジローの3人が正式にメンバーに加わり5人になりデュオからバンドへと変化していく（ちなみに、その秋にリリースされたアルバムのタイトルは文字通り「three&two」これも好きな作品だ）。12月には、シングル「さよなら」をリリース。これが大ヒットし、一躍人気バンドに。82年6月には、武道館10日間公演を果たし、公演最終日の翌日にはアルバム「I LOVE YOU」をリリース。その後、活動休止に入り、鈴木康弘は脱退。

小田は、長年のパートナーを失い、今後のイメージを描けずに、人前で歌う事さえ分からなくなっていた。メンバーと話し合い4人で3年だけオフコースを活動する事と決めた。その第一弾のアルバムが、この「The Best Year of My Life」だ。

以前、オフコースファンの知人に、「オレはこのアルバムが一番好きだ」と話したら「変わっているね」と言われた覚えがある。けれどオフコースの14タイトルあるスタジオアルバムの中で俺が一番好きだ。

セールス的には当然の如くチャート1位を獲得。俺が好きなのはジャケット。メンバー4人が外壁に、はしご等を使ってアルバムタイトルをペインティングしている風景が描かれている。この暖かみが好きだ。

このアルバムからのシングルカットは3枚。「君が嘘をついた」「夏の日」「緑の日々」。「緑の日々」は小田がセルフカバーをしているので耳にしている方も多いかもしいない。俺は「夏の日」のイントロの一楽器ずつ増えていきヴォーカルに入っていくのが気に入っている。

91年、「ラブストーリーは突然に」でソロヴォーカリストとしての地位を確立していく小田和正。ひょっとしたらこのアルバムがなかったら、それもなかったかもしれない。是非一度チェックを。

編集後記

今日は台風一過でいい天気。これから何日かはいい天気が続き、季節はずれの暑さになるみたいだ。

それにしても、この何年かの台風は勢力を落とさずに本州にやってくる事が多い。これは海水温が上昇しているからだと言われている。地球温暖化。私達はなにも悪気なく普通の暮らしをしていると思っていたら、いつのまにか自分達の星を壊していたのだ。これから私達は、この問題とどう向き合っていけばいいのだろうか。きっと、レジ袋の削減とか小さな事の積み重ねていくしかないのだろう。

新型コロナも落ち着きを見せ、人々はいつもの暮らしを取り戻そうとしている。けれど今朝のニュースでは、12月になると東京都の一日の新規感染者が1万人を超えるという数値を東大の研究チームが公表しているとも言っていた。私達は感染対策をしながら、心病まずに暮らしていく。それこそがコロナに打ち勝つ事になるのかもしれない。

「極み」の取材に協力して下さった石栗さん本当にありがとうございました。前向きな生き方と人を一瞬で包み込むような包容力で周りを魅了する石栗さん。81才で車の運転が大好きで、近くでのワークショップ等の仕事は断っているそうです。いつか沖縄で暮らせる日が来る事を祈って折ります。

秋と言えば、栗ごはん、さんま、色々な果物。おいしい物をいっぱい食べて冬に備えましょう。そして（いつも書いている事だけど）、一日一日を自分らしく精一杯いきいきしましょう

それでは・・・

発行所

〒252-2042 神奈川県相模原市中央区横山 4-5-4-107

発行責任者 大滝英史

MAIL nb060234-1625@tbk.t-com.ne.jp

☎ 042(755)9105

発行協力

社会福祉法人アトリエ 一から百まで堂

〒252-0235 神奈川県相模原市中央区相生 4-13-5

振込先

フク)アトリエ

ゆうちょ銀行 ○九八(098)店

普通 1208349

記号番号 10960-12083491

